

ドイツ語における時制意味分析試論(V)

——過去形、または「想起」・「虚構」・「丁寧さ」のあいだ——

湯 浅 英 男

目 次

0. はじめに
1. 過去形を用いた儀礼表現とその統語論的特徴
2. 話法詞 „doch“ と文意
3. 三上章による日本語テンスの分析からのアプローチ
 - 3.1. 「想起と主張」の対立
 - 3.2. 「儀礼的な問いとただの問い」の対立
4. 過去形の本質と儀礼表現
 - 4.1. 「想起」というモドゥスについて
 - 4.2. 過去形の時間表示と儀礼表現
5. まとめ

0. はじめに

過去形が過去時（厳密に言えば発話時以前）を表示しない場合としては、拙論 1985 b, 4.1. で触れた「慣用化した婉曲的用法」による儀礼表現を挙げることができるが、前稿では、なぜ過去形を用いることが「丁寧さ」を生むかについて、必ずしも十分論議が尽くされていたようには思われない。そこで本稿においては、その後行なった幾つかの考察を補足し、そうした問題に関する議論を¹⁾少しでも深めておきたい。

1. 過去形を用いた儀礼表現とその統語論的特徴

とりあえず考察の対象となる、過去形を用いた儀礼表現を D. Wunderlich の例 (S. 139) から拾い上げておく（彼の例文における文頭の小文字は大文字に直

した。拙論 1985 b, S. 42f. も参照)。

(1) (a) Sie bekamen doch die pommes frites?

(ポンフリを御注文なさいましたか)

(b) Wer erhielt das Bier?

(どなたがビールを御注文なさいましたか)

(c) Wo war das Gulasch?

(グーラッシュはどなた様でしたか)

(d) Wie war doch Ihr Name?

(あなたは一体どなた様でしたか)

過去形と、こうした儀礼表現に含まれる「丁寧さ」との関わりを探るために、ひとまず上記の例文の統語論的特徴を以下のようにまとめてみた。

(2) (a)過去形が使用され、それが現在形と交替しても文の基本的意味(つまりは客観的な時間表示に関する意味)は変化しない。

(b)疑問文、とりわけ疑問詞を含む疑問文が多い。

(c)この種の過去形は、話法詞(Modalwort)の „doch“ と共起可能である。

ここに挙げた3つの特徴のうち、われわれは(2c)の „doch“ を手掛りとして、(1)の儀礼的な表現形式がもつ意味について考察してみる。

2. 話法詞 „doch“ と文意

„doch“ の意味を主立った幾つかの辞書について調べると、以下のようになる。

- (3) (a) 「既定の事態の再確認」の一用法として、「疑問詞をもつ過去時称の疑問文で、忘れかけていた事の再確認」に使用。

(国松他編, 小学館独和大辞典, 1985)

- (b) „drückt in Fragesätzen aus, daß der Sprecher nach etwas eigentlich Bekanntem fragt, an das er sich im Moment nicht erinnert.“

(G. Drosdowski 他編, Duden Deutsches Universalwörterbuch, 1985)

〔元々は既知のことで瞬間思い出せない事柄を話者が尋ねているのだ、ということ、疑問文の形で表現する。〕

- (c) „deutet in Ergänzungsfragen auf früher Gewußtes, momentan aber Vergessenes hin.“

(R. Klappenbach/W. Steinitz 編, Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, 1978)

〔補足疑問文の中で、以前は知っていたことだが一瞬忘れてしまったことを指示する。〕

このような „doch“ の意味記述を参考にすると、過去形を用いた儀礼表現においては、以下の意味内容が前提されていると言える。

- (4) (a) 質問内容は、話者が以前知っていたことである。

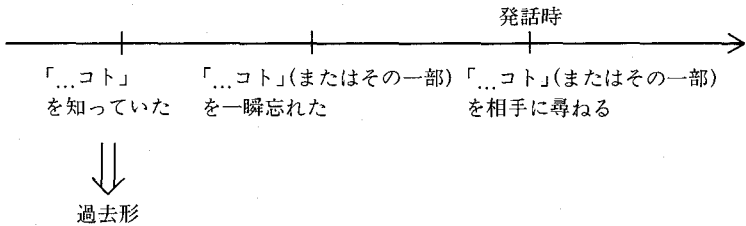
(b) 話者はそれを一瞬忘れた。

(c) したがって、話者は再確認のために相手に尋ねる。

ここであえてこのような儀礼表現が含む意味と過去形の接点を求めるとしたら、それは一体どこに求められるのであろうか。(4ab)は明らかに „doch“ の含意であって直接的には過去形と関係がないし、また (4c) においても、尋ねる

という行為が儀礼表現の疑問文という形式と対応しているだけである。だがそれにもかかわらず、これら含意される文の統語論的メルクマールが儀礼表現の表層に生起していると仮定することは可能かもしれない。端的に言えば、われわれはここでは (4a) との関係で、次のような過去形使用に関する仮説を提起してみたい。

- (5) 儀礼表現における過去形は、「私は『……コト』を知っていた」(ich wußte, daß ……)の過去形のメルクマールが言表へ表出したものである。(=図 1)



(図 1)

ここで、「知っていた」という動詞が言語慣用上なぜ過去形なのかについて説明すると、それは、過去の事態と「今、尋ねる」という現在の行為との結びつきが切断されているから、ということになる。それとは反対に、「一瞬忘れた」はそうした現在との関わりが存在しており、その結果、現在完了形が使われる (ただ A. Steube, S. 177 のように、(1)の儀礼上の決まり文句 (Höflichkeitsfloskel) が告知する意味内容の一部として、過去形による „Ich vergaß, ……“ を示しているような例もあるが、この場合の過去形は、「遠慮」・「恐縮」——つまり、尋ねる相手に対して「忘れた」という事実は堂々と主張できるような内容ではない——といった別の発話戦略上の意図が働いているように思われる。拙論 1985 b, S. 45ff. 参照)。今、現在の行為との結びつきを、理由を説明する「ナゼナラ」という接続詞で表わし、両者の違いをまとめると次のようになる。つ

まり「『私はXを尋ねる。』ナゼナラ『私はXを知っていた』カラデアル」は矛盾しており不可能であるのに対し(⇒「知っていた」は通例では現在完了形で言えず、結果として過去形を使う)、「『私はXを尋ねる。』ナゼナラ『私はXを一瞬忘れた』カラデアル」は可能となる(⇒「忘れた」は現在完了形で言える)(拙論 1985 b, S. 54, 注 15。現在完了形と過去形の区別については拙論 1983 a, S. 51 も参照)。

3. 三上章による日本語テンスの分析からのアプローチ

3.1. 「想起と主張」の対立

(5)の仮説では、まだ実際には過去形と「丁寧さ」そのものとの結びつきはみえてこない。そこで今度は、日本語にみられる(1)と同様な表現に対する三上章の分析(その概要はすでに拙論 1985 b, S. 53f. 注 14 でも触れている)を手掛りに、過去形と「丁寧さ」との関わりを探ってみたい。三上(S. 219ff.)は単純現在「何々スル」と単純過去「何々シタ」に対し5つの意味論的対立を考えているが、このうち本稿の問題と関係が深いのは、「想起と主張」、「儀礼的な問いとただの問い」の2つの対立である。

「想起と主張」の対立はある命題の「認識の時日の区別がテンスにあらわれるもの」(S. 225, 以下, 引用箇所の特号・傍線は三上)であるが、三上の挙げた具体例(S. 226)をここでも挙げておく。

(6) (a) 七分の一ハ循環小数ダネ? (原文は少数, 筆者注)

七分の一ハ循環小数ダッタネ?

(b) —— 明日, ゴ都合ハドウデス?

—— 明日ハダメデス。明日ハ研究会ガアリマシタ

(c) 宮本武蔵ハ絵ノ方モ達人ダッタ

宮本武蔵ハ絵ノ方モ達人ダ

そして三上の解釈 (S. 226) をみると、(6a) については「数学的真理には過去も現在もないが、後者はこのことは既に教えたはずという心持の言方」、(6b) についても「既定の予定を想起した言方」と言う。また、(6c) は「命題と話手の立場とに距離があれば想起の過去形を使い、距離がなければ現在形による主張」と述べている。

三上の説明で特に重要なことは、「命題の成立自身には過去とか現在とかの時間的区別はな」いということである (S. 225)。つまり命題に含まれる動詞は、ここでは自らの成立の客観的時間に関する情報を何ら呈示していない、つまり無時間的ないしは超時間的だといっているのである。そして、こうした命題内容を除いた「タ」が表現するのが、この場合には話者の「心持」・「想起」であり、命題との「距離」——当然のことながら、客観的な時間的距離ではなく主観的な心理的距離——なのである。よって(6c)の2番目の発言も、決して宮本武蔵の同時代人に限定されるものではなく、われわれが今そのように言うことも可能である。モドゥス (modus) がディクトゥム (dictum) を包むというモデル (拙論 1981, S. 57ff; 1985 a, S. 145f. 参照) でいうなら、命題内容はディクトゥムに該当することになる。(6a)を例に、言表と意味構造との対応を考えると(7)のようになる。

(7) (a) 七分ノ一ハ循環小数ダ ネ?
 ディクトゥム モドゥス

(b) 七分ノ一ハ循環小数ダ ッタネ?
 ディクトゥム モドゥス

ここで助動詞「タ」の意味論的ないし表現論的な性格づけについてコメントしておけば、(7b)の「想起」の場合は明らかにモドゥスに属し主観的表現といえるが、三上 (S. 220f.) のたとえば「事実としての完了」を表わす「タ」はディクトゥムに属し客観的表現だと言える (金田一, S. 224ff. 参照)。そのことを渡辺 (S. 277) の用語を使って言えば、日本語の助動詞「タ」は詞的素材性をもつ

と同時に、述語（渡辺の「述語」は終助詞を除く）の一部としても働く「二重性格」を帯びることになる。このような日本語の「タ」に対しドイツ語の場合は、主観的な「想起」は過去形で、客観的な「完了性」（拙論 1981 に従えば、「遂行性」と「前時性」）は現在完了形でと、基本的な役割分担ができていていることになる（拙論 1985 a, S. 150ff. 等も参照）。

3.2. 「儀礼的な問いとただの問い」の対立

話を本題にもどせば、三上は(6)の対立が儀礼的なものになったものとして、次のような例を挙げる（S. 226f.）。

(8) (a) 油絵ヲオ描キニナリマシタネ?

油絵ヲオ描キニナリマスネ?

(b) オ名前ハ何トオッシャイマシタ?

オ名前ハ何トオッシャイマス?

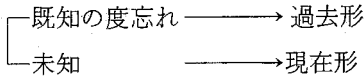
(c) アナタハドナタデシタカ?

アナタハドナタデスカ?

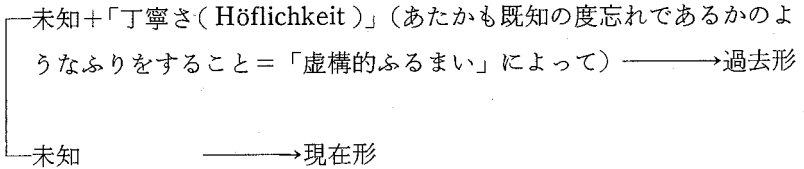
三上は「相手を既に知っているという気持を表すことが敬意になる」と述べ、さらにこれら(8)の対立でも、「じっさいに既知の胸忘れと全然の未知との対立」であれば(6)のような「想起と主張」の対立になると言う。いうなれば、(8)における「既に知っているという気持」は虚構のふるまいであり、こうした虚構のふるまいに過去形が力を貸していることになる。また、三上がこれらの用法を「疑問文乃至疑問文に準じるものに限る」と述べている点は、ドイツ語の過去形を用いた儀礼表現と共通すると言える（(2b)を参照せよ）。

ここで「想起と主張」の対立も含め、三上の日本語に対する考察から導き出されることをまとめてみると(9)のようになる（過去形は「～シタ」、現在形は「～スル」の各タイプを指す。また、三上の「胸忘れ」は「度忘れ」に変えた。）

(9) (a) 「想起と主張」の対立



(b) 「儀礼的な問いとただの問い」の対立



ここでようやく過去形と「丁寧さ」の接点が現われてきたといえる。ただ三上の分析は日本語のテンスを対象としているため、これがドイツ語に対しても言えるためには、両語の使用者に次のような共通の語用論上の心的態度・慣習を仮定しなければならないであろう。

- (10) 尋ねる内容が本来未知のことであったとしても、言語上(つまり語彙ないしは統語論的手段を用いて)、それがあたかも既知の度忘れであるかのような態度(=「虚構的ふるまい」)を示すことは、相手に対する「丁寧さ」を生み出す。

過去形と虚構性の親縁性は、K. Hamburgerの「物語の過去形」ですでにわれわれの知るところである(たとえば拙論1983b参照)。

4. 過去形の本質と儀礼表現

4.1. 「想起」というモドゥスについて

過去形を「想起の時制(Tempus der Erinnerung)」として捉えたH. Brinkmannの見解はすでに紹介したことがあるが(拙論1981, S. 67; 1983a, S. 59f. これらにおいては„Erinnerung“に対し「回想」という日本語をあてたが、ここ

では拙論 1985 にあわせて「想起」とする)、「過去形」、「過去」あるいは「想起」といった言語・時間・心的様態(モドゥス)の関係については哲学者の間でも議論されているようで、最近では大森(1985)に Brinkmann との共通点を見ることができる。氏のいくつかの見解を挙げれば、たとえば、「過去性の意味は想起体験で想起される過去形の経験の中にすべて埋めこまれている」のであり、「この過去性の意味の中に「今より以前」という比較時刻的過去性の意味もまた内蔵されている」(S. 115)とか、過去の「形をもたない模糊とした不定形な^{アモルファス}経験」が「言葉に成り過去形の経験に成ること、それが想起なのである」とか、「過去形という言葉が作り上げられること、それが過去形の経験が制作されることなのであり、それが「過去を思い出す」といわれることなのである」(S. 120)等々である。つまり過去形という言葉、過去形の経験の制作が想起することと同一の体験であることを氏は強調している。ここで氏の言い方をわれわれの文脈に引きつけて使うならば、まさにアモルファスな命題内容 P を想起することが、過去形の文の制作ということになる。ただ氏の、「今より以前」という比較時刻的過去性の意味が想起体験の過去性に内蔵されているという見解については、われわれとしては、むしろそれは想起体験から副次的に(つまり絶対的な帰結としてではなく)派生するものであるという言い方をしたい気がする(たとえば拙論 1983 a, S. 66 参照)。

4.2. 過去形の時間表示と儀礼表現

ところで拙論 1985 a においては、命題内容を含む過去形の意味を(メタ言語を使って)「私(=話者)が P を想起する」(簡略にして「想起(P)」)と表わしているが(筆者が用いる P は完了の意味をもたない、つまり完了的表現はとらない。仮に想起されることがそうした意味を伴う時は、「想起(SV(P))」(但し、 $SV(P) = p$ sei- vollzogen)と表示し、この場合、言表においては過去完了形をとることになる。われわれは志向される命題として、動詞部の性格によって p/SV(p) の 2 つを想定している)、その際問題となるのは、想起される命題内容 P の時間的意味(当然発話時を基準とした)と、(1)の儀礼表現における時間的意味の関係である。ここで先程の大森氏の表現を借りて結論的なことを先取

りするならば（同時に前節の最後に述べたことを繰り返すことにもなるのだが）、「発話時以前」という客観的比較時刻的時間性は、想起体験の中に内蔵されていることがほとんどであるとはいえ、絶対的にそのような場合ばかりであるとは言えないということである。そしてこのことは、(1)のような過去形の表現が端的に示している。つまり(1d)において、「あなたの名前が何であったか」という問は、当時の名前が現在では変更してしまっていることを前提としているわけではなく、「今、あなたの名前が何であるか」という問と部分的に重なり合う可能性がある。また(1b)の問においても、過去のある時点を基準に考えれば、その過去の時点以後（この「以後」という時間は、動詞が完了相であることから派生してくる）に誰がビールを受け取るか、ということを探ねているとしても（つまり *Wer erhält das Bier?* が発話時以後に誰がビールを受け取るかを探ねているのと平行的な関係において）、その事態の成立が発話時を基準にしてどのような時間的關係にあるかについて、過去形は本来的な意味で何も述べていないのである。われわれは、時制という統語論上のシステムが客観的時間關係についての情報を本質的に内蔵している場合は、完了時制つまり未来完了形・現在完了形・過去完了形に限られ、その場合の完了時制がもつ客観的時間關係は、「ある時点（当然発話時の場合も含めて）より以前」と考えている。このことを拙論 1981, S. 64 においては「前時性 (Vorzeitigkeit)」という意味特性とみなし、完了時制が「遂行性 (Vollzogenheit)」という意味特性を同時にもつことを考慮して „VOLLZOGEN + KOPULA“ と表示したし、また拙論 1985 a, S. 151 では „(P) sei- vollzogen“ (d を P にかえた) とした。W. Schmidt (S. 221f.) は時間の相対性 (Relativität) の形態として、「同時性 (Gleichzeitigkeit) ・「前時性 (Vorzeitigkeit) ・「後時性 (Nachzeitigkeit)」の3つがあることを認めた上で、「体系的 (systemhaft) には、前時性の表示のための手段だけが発達している」と言い、W. Admoni (S. 182) も「文法的な観点からは、ドイツ語においては前時性だけが考慮される」と述べているが、彼らのこのような言葉は、とりわけ完了時制がもつ「前時性」の意味特性に注目したものである。こうした考えを有標 (markiert)/無標 (unmarkiert) の観点から言えば、「前時性」という意味論的メルクマールにおいて、完了時制が

有標, 現在形・過去形・未来形の未完了時制が無標ということになる。時制の時間的表示に関して, 過去形が有標, 現在形が無標ということが一般に言われるが(たとえば Bünting, S. 112 等参照), こうした過去対非過去の場合の有標性の根底には, (われわれの立場からみれば)「想起」という話者の心的態度つまり主観的時間性があり, 完了対未完了における客観的比較時刻的時間性とは異質なものが基準になっていると思われる。

以上, 過去形が発話時以前という客観的比較時刻的時間性の表示を統語論上義務づけられてはいないということを, 多少くどく説明してきたが, このことが結局のところ, 本稿の(1)のような過去形の儀礼表現を許容する1つの要因になっていると言える。整理の意味で6時制に対して「想起」/「前時性」という2つのメルクマールの有無を呈示しておく。これによって, 他の時制と異なる過去形の意味論的特質が明らかになるであろう。

(II)

(時間に関する意味論的メルクマール)

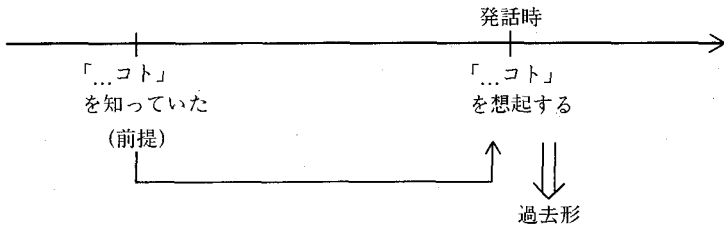
			〈想起〉	〈前時性〉			
(時制)	未	来	形	—	—		
	未	来	完	了	形	—	+
	現	在	形	—	—		
	現	在	完	了	形	—	+
	過	去	形	+	—		
	過	去	完	了	形	+	+

5. まとめ

ところで, 過去形は命題内容Pの生起ないし成立の, 発話時を基準とした客観的比較時刻的時間性に関して何も表明していない, と仮定したとしても, 過去形による発話が「想起」という心的態度すなわちモドゥスから生まれるとすれば, 「想起」するための, 命題内容Pに関わる条件が存在するはずである。そ

れをわれわれは、(4)における „doch“ の含意のひとつである「話者がPを以前知っていた」という事態だと考えたい。つまり、過去のある時点においてPを知っていないと、発話時点においてPを想起することはできないということである。となれば、(5)の仮説は、次のような過去形そのものに関わる条件と重なってくる。

- (12) 過去形は「私は『……コト』(=命題内容P)を知っていた」を前提とする。(=図2)

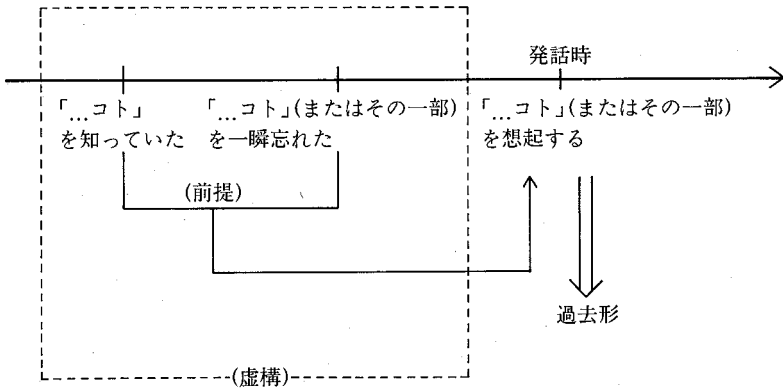


(図2)

ただし(12)においても、過去形を用いた疑問文(たとえば, *Wo warst du?*)にまで、(1)のような場合を除けば)いわば既知の度忘れを前提とすることは現実にはむずかしい。だが過去形は本来物語る時制であり(拙論 1983 a, S. 61ff. 参照), 疑問文において用いること自体必ずしも一般的ではない。だが(1)のような過去形の表現においては、疑問文が——特に(1)においてはほとんどが疑問詞による補足疑問文で、相手に *ja / nein* の二者択一を求める決定疑問文をあまり用いないことも関係しているが——過去形のもつ「思想の低回性」(細江, S. 89)を一層顕著に露呈させる結果となり、主観的余韻(ここでは相手に対する「丁寧さ」)を生じさせているようにも思われる。あるいは相手への質問というよりは、むしろ話者自らの想起の作業であると言ってよいかもしれない。

また、(12)を過去形のひとつの語用論的前提とすることは、「物語る」という行

為（それは本質的に過去形を用いることと重なるのだが）の主体が、物語ろうとする出来事・事態を物語る行為以前に知っていた、つまり「全知の語り手（allwissender Erzähler）」であることを前提とすることとも関係してくる（拙論 1983 a, S. 62f. 参照）。このように考えれば、(12)の条件を結節点として、過去形を用いる・想起する・物語るの3つの行為が結びついていると言える。そして本稿で問題とした(1)のような儀礼表現に関連させて言えば、まさに(12)の前提を偽る、あたかもそうであるかのようにふるまうという虚構性が、(三上に従って言えば)相手に対する「丁寧さ」を生み出すことになるのである。(=図3)



(図3)

注

- 1) 本稿は、1985年11月9日に香川大学教育学部で開催された日本独文学会中国四国支部研究発表会において、筆者が「過去形と儀礼表現」と題して行なった発表を基にまとめたものである。
- 2) Wunderlich (S. 139) は、たとえば (1b) の過去形においては、Wer bestellte ein Bier? における過去形のメルクマールが Wer erhält das Bier? と融合 (kontaminieren) したと仮定するか、ないしは Wer wollte, daß er ein Bier erhält? の主文の過去形のメルクマールが埋め込まれた文と融合したと仮定すべきだと考えている(拙論 1985 b, S. 43f. も参照)。彼の解釈では、話者は誰かが注文したということを知っていたとしても、誰が注文したかは知らなかったことになる。従って、„doch“ を手掛りとして、「話者自身が、誰が注文したか(あるいは文字通りに言えば、受け取るか)を知っていた」と見做すわれわれの解釈は、

Wunderlich よりも一歩踏みこんだことになる。だが後の議論でみるように、「知っていた」ということが真実なのか、単なる虚構なのかはまた別の問題である。われわれは人間が言葉で嘘をつくことができるという事実を決して見落としてはならない(それに関しては、たとえば H. Weinrich 1973 を参照)。

- 3) 芳賀(S. 44ff.)によれば、(7)のモドゥスはさらに2つに分類することが可能である。それは、相手がいなくても言える「何か、事柄の内容について、感動したり・断定したり・疑ったり」する「述定のモドゥス」と、相手がいなければ言えない「だれか、相手に向かって、命令したり・呼びかけたり・答えたり・念を押したり」する「伝達のモドゥス」とである。今、前者をMI、後者をMIIとして(7)のモドゥスを下位区分すれば(7')ようになる。

(7') (a)	……	\emptyset	ネ?
		MI	MII
(b)	……	ッタ	ネ?
		MI	MII

引用文献

本文中に記した辞書類は除く。

- Admoni, W.: Der deutsche Sprachbau, 3. Aufl., München 1970.
- Bünting, K.-D.: Einführung in die Linguistik, 8. Aufl., Königstein/Ts. 1979.
- 芳賀綏: 新訂 日本文法教室, 日本教育出版社 1982.
- 細江逸記: 動詞時制の研究, 新版, 篠崎書林 1973.
- 金田一春彦: 不変化助動詞の本質——主観的表現と客観的表現の別について——(服部他編: 日本の言語学 第三巻 文法 I, 大修館書店, 1978, S. 207-249, 初出は 1953).
- 三上章: 現代語法序説——シンタクスの試み——, くろしお出版 1972.
- 大森荘蔵: 過去の制作(新・岩波講座 哲学 1 いま哲学とは, 岩波書店 1985, S. 99-121).
- Steube, A.: Temporale Bedeutung im Deutschen, Berlin 1980 (studia grammatica XX).
- 渡辺実: 叙述と陳述——述語文節の構造——(服部他編, 上掲書, S. 261-283, 初出は 1953).
- Weinrich, H.: うその言語学——言語は思考をかくす事ができるか——, 井口省吾訳注, 大修館書店 1973.
- Wunderlich, D.: Tempus und Zeitreferenz im Deutschen, München 1970 (Linguistische Reihe 5).
- 湯浅英男: ドイツ語における時制意味分析試論(I)——話者の志向的な „modus“ に基づくモデルの構築——(香川大学一般教育研究, 第 20 号, 1981, S. 47-72).
- …: 同, 試論(II)——過去形, または物語ることについて(その 1)——(上掲紀要, 第 23 号, 1983 a, S. 49-73).
- …: 同, 試論(III)——同(その 2)——(上掲紀要, 第 24 号, 1983 b, S. 77-97).
- …: ドイツ語時制の意味構造——陳述論序説——(香川大学教育学部研究報告, 第 I 部, 第

63号, 1985 a, S. 145-159).

… : ドイツ語における時制意味分析試論(IV) —— 過去形, または物語ることについて(その
3) —— (香川大学一般教育研究, 第28号, 1985 b, S. 41-55).